

# キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家

—ラルフ・アダムス・クラムの立教大学和風建築案をめぐって—

鈴木勇一郎

はじめに

二〇世紀に入り、日本の主要なキリスト教学校の多くは、本格的な大学の設立をめざすようになった。そこでは、キリスト教に基づいた大学教育を行うために、本格的なキャンパスの整備が構想された。

もちろんこうした状況はキリスト教学校に限られたものではなかった。この時期には専門学校や大学の公布に代表される高等教育機関拡充の流れの中で、官公私立を問わずキャンパスの整備や郊外への移転が次々と進んだ<sup>1)</sup>。しかし、例えば法律系私立学校の多くが創立以来の市内中心部で段階的に校舎の整備を進めたのに対して、多くのキリスト教学校では一体的なキャンパス整備

や郊外への移転を進めたことにも示されるように、キリスト教学校では、キャンパス整備は相対的により重要な位置づけを持っていた。筆者はこうした状況の中で展開した一九一〇～二〇年代の青山学院のキャンパス計画を中心に、この問題についてすでに検討した<sup>2)</sup>。

その中で明らかになってきたのは、建築を主導する主体の問題、つまり具体的には、外国ミッションと日本人キリスト者との関係が、キャンパスのあり方にも大きな影響を与えたということである。それは、単に財政的な局面のみならず、建築様式、教育の理念や内容にも及んでいた。

立教学院は、明治初期以来築地にその拠点を置いていた。築地は東京市の中心部に近く、条約改正以前は居留

地であり、東京における外国文化の窓口であった。しかし、一方で面積は狭く、立教大学と立教中学校は同じ敷地での同居が続いていた。二〇世紀に入ってから本格化してきた大学拡充構想が具体化すると築地では手狭になり、池袋への移転が検討されるようになった。

本稿では、主に建築家の選定をめぐる経緯を検討するが、日本人の主導性が相対的に強くなりつつあった青山学院とは異なり、立教学院は米国聖公会の主導性が強く、この池袋キャンパスの建設計画も聖公会の全面的な財政的支援のもとで進んでいった。特にその中でマーフィ&ダナ事務所という在米の日本になじみの薄い設計事務所が担当することになったことは、当該期の日本のキリスト教学校の中でも特異なことであった。本稿ではその決定に至るまでの経緯を検討するとともに、その過程で大きく課題となったあるべきキリスト教学校の建築様式をめぐる議論をたどることで、キリスト教学校におけるキャンパス計画と経営主体の関係性の一端を明らかにしていく。

## 1、池袋移転問題とタッカー

立教学院では、一九世紀末に立教専修学校を設立し、中等教育だけでなく高等教育のための機関を設置するよ

うになった。同校は一八九八年に閉鎖となり、立教の高等教育事業は一時中断することになった。しかし一九〇七年には立教大学を設立するなど、再び高等教育に力を入れるようになった。ところが、その際大きな問題となったのが、設備の貧弱さであった<sup>③</sup>。

確かに築地は東京市の中心部に近く、学生や生徒を集めやすい場所ではあった。しかし、総面積二千坪に過ぎない校地に、大学と中学校が同居していたため、設備の狭隘が問題視されるようになっていた<sup>④</sup>。

当時立教中学校の生徒の多くは京橋、日本橋、深川、芝といった当時の市内中心部に近い地域から通学していた。そこで立教学院では当面中学校を築地に残し、大学のみ新たに池袋に用地を取得して移転することを構想していた<sup>⑤</sup>。中等教育と高等教育の空間的分離が想定されていたのである。もちろんこれは、中学校が日本橋や京橋という商業中心地に近いという利便性の問題と、それに付随して将来さらに土地が値上がりすれば、その時点で築地キャンパスを売却し、その利益で池袋キャンパスの拡充に充てることができるという目論見が背景にあった<sup>⑥</sup>。

一九〇九年、当時総理であったタッカー (Henry St. George Tucker) は、立教大学にとって「最も重要な欠点は設備の欠如」であるとし、すでに校舎や寄宿舎が

满怀状態という状況を訴えている。大学を築地から移転させることの必要性を強調している。<sup>7)</sup>

築地時代に立教大学に入学した松下正寿が後に回想しているように、当時は築地の立教中学校の一角に実質的に間借りしているようなもので、実質的には立教中学校の「付属」に近いのが築地時代の実態であった。<sup>8)</sup>

問題視されていたのは、設備だけではなかった。そこで展開している「大学」教育についても危惧される状況にあった。

二〇世紀にはいると、立教だけではなく、各キリスト教学校では高等教育部門を拡充し、大学設立をめざすようになっていた。ウィリアムズやヘボンが日本で宣教を始めてから五十周年、つまりプロテスタントの日本伝道開始五十周年を記念する宣教五十年記念会が、一九〇九年一〇月に東京で開催された。これは日本で伝道活動を展開しているプロテスタント各教派を結集した催しであった。この席上、明治学院総理であった井深樞之助が「基督教々育の前途」と題して講演している。<sup>9)</sup> この中で井深は当時日本の各キリスト教学校がそれぞれ展開しつつあった高等教育機関の実情について次のように指摘している。

「京都には同志社の専門部あり、明治学院と青山学院とには高等科あり、立教学院には大学部あり、東北学院

には専門学部あり、然らば我等は現在の設備を以て満足することを得るか、(中略) 現在中等以上の基督教教育を施しつつある学校は何れも皆其(筆者注・大学) 必要を感じつつあるは明白なる事実なり、何となれば現今日本の情態に於ては、中学卒業の後単に高等普通の教育を受けたるのみにては、卒業後就職の途頗る困難なればなり(中略) 今日基督教学校の高等科に入学者の少き一の重なる原因は此に存するなり」<sup>10)</sup>

立教「大学」を含む当時のキリスト教学校の高等教育機関は、教養主体の教育に留まる中途半端な内容で、高度な専門人としての素養を身につけることができない上に、就職にも差しさわりがあるというのである。もちろんこうした状況に対して各キリスト教学校も手をこまねいていたわけではなく、それぞれ拡充の方策を講じつつあった。立教大学において拡充問題が具体化するようになったのも青山学院や明治学院の動きに触発されたものでもあった。<sup>11)</sup>

しかし井深は各学校が単独で動くことに対して疑問を持っていた。彼は「我等は基督信者として各自分に応じて基督教を全世界に宣伝するの義務を負ふものなり、我等は日本全国を基督教化せんと欲するものなり」として、最終的には日本全体のキリスト化が目標であると述べるが、そのためには「最高の教育機関を設けて基督教的

人物を養成するの必要あるなり」と主張している。つまり、日本をキリスト教化するためには、キリスト教の素養を持った指導者を育成しなければならぬ、そのためには、帝国大学に匹敵するような本格的な大学を設立する必要があるとする。ところが現実には「現在日本の教派中に一手にして之を実行するの資金を有するものあるを」見ない状態であった。そこで日本で活動しているプロテスタント諸教派が共同して本格的なキリスト教大学を創設する必要があるのだと井深は考えていたのである。<sup>12)</sup>

この五十年記念会では、井深の提議を受けキリスト教大学設立の推進を決議している<sup>13)</sup>。これを受けてキリスト教学校では、それぞれの学校が単独で大学をめざすのではなく、各校が共同してキリスト教大学の設立をめざす運動が展開された。これは、当時各教派が共同で事業に当たるエキュメニカル運動が盛んになりつつあったことを背景として、帝国大学にも対抗し得るような本格的な大学の設立を念頭に置いていた。主要なキリスト教学校はその協議に参加したが、各学校や教派の思惑から、それぞれ異なった姿勢を示すようになっていった<sup>14)</sup>。

立教大学は、米国聖公会が他教派との合同や連合に消極的な姿勢を示していた上に<sup>15)</sup>、すでに専門学校令による大学を名乗っていたこともあり、この構想に対して当

初から積極的とは言えなかったが、米国聖公会からの大規模な資金援助の目的が立つようになると、連合路線に対して明確に距離を置く立場を鮮明にしていた<sup>16)</sup>。連合大学に対する消極的な姿勢も米国聖公会の主導性が強かった当時の立教大学の大きな特質であった。

立教学院がキリスト教連合大学へどのような関係を持つとしても、設備内容ともに大学の拡充を図ることは不可欠であった。当初は、築地で隣接地などを買収して拡張するというのも一つの方策として検討されたが、結局「東京市に近接せる閑静の地をト」した郊外への移転を目標むようになった<sup>17)</sup>。

新キャンパスには、定員三百名を想定した校舎、寄宿舎、聖堂、会堂、図書館、標本室、体育館を建設し、野球やテニス、サッカーなどもできる運動場を設置することも予定していた。そのためには二万から三万坪の敷地を確保することが必要だと考えていたのである<sup>18)</sup>。

新キャンパスの建設には莫大な資金が必要であった。タツカールの計算によれば、土地購入に九万五千ドル、校舎やチャペルなどの建物建設に十萬ドル、その他の諸費用に五千ドルの計二十萬ドルを当面必要な資金としていた<sup>19)</sup>。なおこれは当時のレートで日本円に換算して約四十萬円となる。そこでタツカー本人が、一九〇八年一二月から一九〇九年六月までアメリカに赴き、現地で

資金募集を行った<sup>(30)</sup>。

こうしたタツカーらの熱心な運動により、フィラデルフィアでは婦人海外伝道補助局のメンバーが中心となり「立教大学資金募集委員」が設置されるなど募金活動は活発化し<sup>(31)</sup>、約十萬円の寄付を集めることに成功した<sup>(32)</sup>。これらを元手として、一九一〇年一月に当時東京市外であつた池袋に一萬七千坪の校地を購入した<sup>(33)</sup>。

さらに建築資金を募集するため<sup>(34)</sup>、一九一〇年八月には、マキムと元田作之進も渡米して募金活動を展開した<sup>(35)</sup>。いずれにせよ、池袋キャンパス建設の資金は、アメリカでの募金に頼ることを前提としていたのである。

池袋は、品川と赤羽を結んでいた日本鉄道品川線に田端への支線を敷設した際に、その分岐点に一九〇三年に設置した駅で、近世からすでに町場であつた新宿や渋谷とは異なり、停車場が設置されるまでは純然たる武蔵野の農村地帯に位置していた。その後、都市としての東京の膨張やそれに対応した山手線の電車運転の開始などで、徐々に都市化が進んでいたが、依然として東京の既成市街地とは離れた郊外の地域に位置していた。それだけに、既成市街地に位置し敷地の狭隘な築地とは異なり、今後大きな発展が期待できる場所であつた。「市附近の地所にして将来の発展を予期し得き所<sup>(36)</sup>」という当初からの思惑にまさに沿つた場所だったのである。

購入直後の一九一〇年四月七日、タツカーは実家に宛てた手紙の中で「東南の端に面して大学本館を置き、反対側に中学校を置く。その間の敷地に寄宿舎、チャペル、教員住宅、それから運動場を設けるつもりです」と、キャンパスについて自らの基本構想を記している<sup>(37)</sup>。

## 2、クラムと「和風建築」

ところが実際にどのようなキャンパスを建設するのかわつたという具体的なプラン作成の段階になると、事態は一転して複雑な展開を見せるようになった。

タツカーは一九一一年夏に賜暇でアメリカに一時帰国している。その際、米国聖公会伝道局のウッド (John Wilson Wood) は、クラムという建築家に新たな大学の建築について相談するように示唆した<sup>(38)</sup>。

ラルフ・アダムス・クラム (Ralph Adams Cram) は、日本ではあまりその名を知られていないが、一九世紀から二〇世紀の前半にかけてアメリカで活躍した著名な建築家である<sup>(39)</sup>。二〇世紀の前半、アメリカにおいて教会建築をはじめとするゴシック建築の建設を推進し、ウエストポイント陸軍士官学校やプリンストン大学の校舎を設計したことで知られる。クラムは建築家として活躍する一方、米国聖公会の有力信徒の一人として知られ

ていた。恐らくその関係からタツカーに紹介されたのだろう。クラムはタツカーを快く迎え入れると、「もし日本風の建築に賛同するのなら、私が無償で設計図を引こう<sup>(30)</sup>」と申し出たという。

クラムはゴシックリヴァイバル建築の推進者であり、いきなり和風の建築を設計したいなどと言い出すのは、一見すると唐突な印象を受ける。しかし、彼のプロフィールをよく見ていくと、決してそうではないことがわかってくる。

クラムは、一九〇五年に『日本建築の印象』“Impressions of Japanese architecture”という日本建築の特質について検討した著書を著している。

この本は直接的には一八九九年に来日し、約一カ月にわたり、京都奈良地方を回って日本の古代建築について調査したことをきっかけとして執筆したものである<sup>(31)</sup>。なぜ来日して日本建築について造詣を深めるに至ったのかについて、彼はその経緯を一九三〇年に再版された際に記している<sup>(32)</sup>。そこから次のような事情が明らかとなった。

アーサー・メイ・ナップ (Arthur May Knapp) は、ユニテリアン教会の宣教師として来日し、伝道活動に当たっていた。クラムはこのナップと親しく、マサチューセッツ州フォール・リヴァーでナップの自宅を和洋折衷

様式で設計していた。ナップは自らの日本美術のコレクションを展示することを目論んでいた<sup>(33)</sup>ので、その目的に適った様式を望んだのである。

クラムは、「早くからモースや岡倉天心など「ボストン・オリエンタリスト」と呼ばれた人々と交流を持ち<sup>(34)</sup>、来日する前から日本建築に強い関心を抱いていた。アメリカのジャポニズムは、一九世紀末から一九一〇年代にかけて隆盛を極めるが、絵画や彫刻だけでなく建築や音楽など幅広い分野に浸透していたとされる<sup>(35)</sup>。クラムの日本への関心もこうした流れの中に位置づけることができらるだろう。

このころ日本では、帝国議会議事堂の建築計画を進めていた。第一議会后、火災で焼失した第一次仮議事堂に代わり、一八九一年には第二次仮議事堂が再建されていたが、慎重な検討を経て本格的な議事堂をいざれ建設することになっていた。

しかし、この仮議事堂は、規模こそ大きなものであったが、第二議会の開会に間に合わせるため、わずか数カ月で建設した、その名前の通りあくまで仮建築であった。そこで一八九七年、閣議は議院建築のための調査を始めることを決めた<sup>(36)</sup>。

ナップは、農商務大臣として第三次伊藤内閣に入閣していた金子堅太郎など政界の有力者とも親しく<sup>(37)</sup>、こう

した人間関係の中から当時首相を務めていた伊藤博文とも関係ができたとも考えられなくはない。金子はこの時には農商務相として入閣していたが、憲法の制定や議院制度の創出に長く関わってきた人物であった。

とはいえ、金子は元来、議事堂に和風様式がふさわしいなどと考えていたわけではない。一八八九年に議院制度の調査のため欧米を視察しているが、その際には一時帰国していたナップがさまざまな便宜を図っている<sup>38</sup>。金子は、この視察で議会の制度だけを見てきたわけではなく、当然それを容れるべき建物、つまり議事堂の建築についても学習してきた。帰国後の一八九一年に金子は『議院建築意見』を著し、将来建設される日本の国会議事堂の建築について、自らの見解を公にしている。

そこで金子はオーストリアの議事堂のように「他国ノ歴史ヲ以テ、自国ノ議院ヲ裝飾スルガ如キハ、国家的ノ精神ヲ薄弱ナラシムルモノ」として避けるべきであり、むしろイギリスのように「其ノ王家又ハ其ノ歴史及ヒ其ノ英雄豪傑ノ事績ヲ以テ、議院ヲ裝飾スル」べきであると主張する<sup>39</sup>。そこで新たに建設される議事堂は「日本美術ノ集粹トシテ、万世不朽ニ伝ハルヘキ堅固莊嚴ナモノ<sup>40</sup>」であることが必要である。つまり、日本美術を広く世界に向けて発信するものでなければならぬと金子は考えたのである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、日本美術を用いるのは柱、天井、敷物、壁紙といった内装であり、建築自体はあくまでも「欧羅巴流」であることが前提であったのである。そうすることによって「東西ノ思想ヲ調和協合」することが可能になると考えていた<sup>41</sup>。欧米諸国の議事堂を見に来た金子は、内装こそ日本美術の発信の場と位置づけるものの、日本でも議事堂の外観としては、あくまでも西洋風の建築がふさわしいと考えていたのである。

近代化をめざす日本にとって議会や役所など、公的な役割を担う建築物は、正統的な西洋建築で建てられることが望ましいものであった。ジョサイア・コンドルらわざわざ外国から西洋人の建築家を招聘したのもそのためであったと言える。

実際、一八九〇年代以降、ドイツから招聘したエンデおよびベックマンは官庁集中計画の中で帝国議会議事堂に和風を取り入れたプランを作成したが、これは当時「和七洋三の奇図」などと酷評された<sup>42</sup>。その後同じくドイツから招聘されたフランツ・バルツァーも東京中央停車場を和風で設計しているが、いずれも採用されることはなかった。基本的には近代的な機能を持つ建物は、西欧の伝統的な様式建築を採用することを正当としていたのである。

それはお雇い外国人建築家の跡を受けた日本人建築家にとっても事情は似たようなものであった。一八九九年、日本勧業銀行本店を妻木頼黄と武田五一が和風様式で設計した。これは、この建物が当初、旧鹿鳴館や帝國ホテルといった、当時の東京を代表する西洋建築と対に位置するという極めて特殊な状況の中で決められたものであったが、それでも当時の建築家の多くは「奇異奇怪の念が起つて不快に感じ」るような状況であった<sup>(44)</sup>。一九一〇年代後半になると東大建築学科の卒業設計に和洋折衷様式が数多く提出され、大正後期には、和風のコンクリート造りの建物が建てられるようになっていくが、この時期にはそうした動きはまだ顕在化していなかった。

クラムが日本にやってきた一八九八年という時期は、仮議事堂完成から十年近くたち、本格的な議事堂建築をめぐる具体的な議論が開始された時期であった。クラムの来日は表向き「日本の造家術を研究し之を米国の家屋に応用する<sup>(45)</sup>」ことを目的としていたが、すでに来日前に建築家バートラム・グッドヒュー (Burtram Goodhue) と具体的なプランの準備をした上で来日しているように、新たな議事堂を設計するということを最大の課題として日本にやってきたのである。

こうしてクラムは一八九八年二月一四日に実際に来日

し、具体的な設計プランの作成に携わった。彼は和風の議事堂建築案を作成し、四ヶ月後帰国の途に就いたのであった<sup>(46)</sup>。しかしその直後、第三次伊藤内閣は総辞職し、翌年に組織された議院建築調査会も目立った活動のないまま廃止された<sup>(48)</sup>。この時点で議院建築様式に関する具体的な動きは立ち消えとなり、クラムの作成した和風建築の議事堂案もお蔵入りのこととなった。

議事堂建築をめぐっては、その後も数十年にわたって辰野金吾や妻木頼黄をはじめとした当時の日本を代表する建築家たちが、誰がどのような様式で設計するのかをめぐって、長い論争を繰り返した。こうした動きは、特に一九一〇年前後から激化していくことになるが、いざにせよ、すみやかに解決するような簡単な問題ではなかった。こうしたことから考えて、議事堂建築の設計に関するクラムの回想をそのまま鵜呑みにすることはできない。しかし、当時日本様式が建築界において注目される状況になっていたことやクラム自身の議事堂案が実際に残されていることから、全く彼自身の思い込みというわけであったというわけではないだろう。

当初の目的こそ失敗したが、クラムはその過程で実際に日本を訪れ、京都奈良地方を回って日本の古代建築について研究することができた<sup>(50)</sup>。その成果をもとにクラムがまとめたのが先に触れた『日本建築の印象』だった



のである。この本はアメリカ人が日本建築という課題に本格的に取り組んだ最初の成果のひとつであった<sup>(51)</sup>。クラムは一九三〇年代になっても改訂増補版も出さずなど、日本建築に対する強い関心はこれ以降も持ち続けていた。さらに言ってしまうと、日本の国会議事堂では挫折した和風建築の実現の野望を持ち続けていたとも言える。クラムがタツカーに対して、和風様式の実現を希望した背景には、以上のような経緯があったのである。つまりクラムの提案は、明治後期以降に日本人たちによって推進された「近代和風建築」ではなく、外国人によるジャポニズムに影響されたプランであったと位置づけることができるだろう。

いずれにしてもタツカーはこの申し出に賛同し、クラムに設計案の作成を依頼した。数カ月後、タツカーはクラムの作成したプランを見て「私自身が予期しなかったような、美しくかつ我々の希望に沿った案」として、非常に高く評価した<sup>(52)</sup>。クラムがこの時に作成したプランがどんなものであったのかは現時点では不明だが、少なくともタツカーにとっては満足のいくものであったようだ。

タツカーは、アメリカから日本に帰任すると早速、聖公会や立教大学に関係する日本人たちにクラム案を示した。ところがタツカーとは異なり、彼ら日本在住の聖公

会関係者たちの評判は芳しいものではなかった。特に日本人たちは単にクラム案に対して拒絶反応を示したのみならず、「まるで封建時代の牢獄だなどこの案を蔑んだ」のである<sup>(53)</sup>。タツカーは彼らのこうした評価を妥当なものとは捉えなかったようだが、少なくとも立教大学の新キャンパスの建築には和風建築ではなく、正統的な西洋建築を強く希望していることは痛感したようだ。

文明化を強く標榜していた当時の日本人キリスト者が、和風建築などを希望することは考え難い。一九三〇年代のことになるが、主に上海などで活躍し、日本でも聖路加国際病院の設計も手がけた米国聖公会系の建築家バーガミニ (John van Wie Bergamin) も、日本人キリスト者はキリスト教の建築として、仏教の礼拝に密接に関連した社寺の様式ではなく、ゴシック様式を好むことを指摘している<sup>(54)</sup>。そうした状況の中、和風建築が案として浮上してきたのは、当時のアメリカ人のジャポニズム意識の現れと見ることもでき、実はそこにも当時の立教の性格を見ることができよう。日本聖公会には、奈良、京都、彦根などに和風の教会堂が現在でも存在しているが、それらは外国人宣教師の主導によるものか<sup>(55)</sup>、景観上の理由か<sup>(56)</sup>によって採用されたものである。

そこで次にタツカーが日本人たちの希望を汲んで採用

を提示したのがカレッジゴシック様式であった<sup>(58)</sup>。中世の教会を起源とする大学の建築としてゴシック様式を採用することは、ある意味正当な流れに属するといえるが、カレッジゴシック様式は、一九世紀に急速に進んだ近代化と大規模化に対する反省として、このころアメリカで特に流行していた<sup>(59)</sup>。クラムはこうしたゴシック・リヴァイバルの旗手として活躍していたのは皮肉である。

### 3、建築様式検討委員会の開催

タッカーは、日本への帰任後まもなく一九一二年に監督として京都に赴任し、立教大学総理を辞任した。キャンパス計画の具体的な検討は、タッカーに代わり新たに総理に就任したライフスナイダー (Charles Shriver Reinsider) のもとで進められた<sup>(60)</sup>。ライフスナイダーはクラム案を「甚だ不様なもの<sup>(61)</sup>」として、否定的な見解を示した。

その当時まだ築地にあった立教の校舎の設計は、ほぼ一貫してガーディナー (James McDonald Gardiner) が担当してきた。築地校舎とその周辺では、六角塔校舎、寄宿舎、三一神学校や三一大聖堂など、彼の設計した建物によって埋め尽くされていたといつてよい。

ガーディナーは一八八〇年に来日し、立教学校校長や立教大学教授を歴任するなど教育者として活躍する一方、数多くの教会や学校、住宅などの設計を建築家としても活躍した。一九〇三年以降、設計事務所を構えて独立して活動するようになったが<sup>(62)</sup>、その後も聖公会が建物を設計する際にはしばしばアドバイザーとして計画に携わつていたとされる<sup>(63)</sup>。またこの時期には、青山学院など他教派のキリスト教学校の設計も手がけるなど、在日の有力な外国人建築家に成長しつつあった。しかし、彼は大学では正式に建築学の課程を修めたわけではなく<sup>(64)</sup>、その意味ではアマチュアの建築家でもあった。

立教の建築とガーディナーとのそれまでの密接な関係を考えみると、新たに建設される池袋キャンパスも彼が手がけるのが自然な流れであったようにも見える。しかし、最終的に彼が池袋キャンパスの設計を手がけることはなく、その後の推移はより複雑なものとなった。

ガーディナーのほかタッカーおよび宣教師スイート (Charles Filkins Sweet) から成る建築様式検討委員会が組織され<sup>(65)</sup>、一九一二年五月三〇日に報告書をライフスナイダーに提出した<sup>(66)</sup>。

ライフスナイダーによれば、委員会で最大の懸案であったのが、和風建築を採用することの可能性<sup>(67)</sup>であった。実はまだクラムの唱えていた和風建築の採用という

線は消えていたわけではなかったのである。

「日本における学校及び大学に和風建築を採用することとがふさわしいかについての意見」と題されたこの報告では、クラムの著書を引用しつつ、日本建築を寺院、城郭、住宅の三つの形態に分けてその特徴を論じ、いずれも学校建築にはふさわしくないと結論づけている。そしてこうした建築にはゴシック様式を採用することが望ましいと結論づけている<sup>(66)</sup>。

委員会の経緯は米国聖公会の伝道機関誌『スピリット・オブ・ミッシヨンス』でも次のように報じられている<sup>(67)</sup>。

委員会は、多くの日本人にも相談したが、相談を受けたものはみな、完全に反対だとまでは言えないにしても、新しい建物に全面的に日本様式を取り入れることは、まちがいだという意見を表明した。多くの外国人はもちろん、純粹に感傷的な理由と日本建築に対する尊敬心からその見解に従った。

これらの観点から、委員会は、異議なく建物の建設にあたっては、日本様式ではなく、完全なカレッジゴシック様式を採用することを答申した。<sup>(70)</sup>

すでにタッカーに打診された時点で日本人たちが強く反発したということはすでに触れたが、やはり在日の米国聖公会の宣教師たちもその採用には消極的であった。

そしてここでもカレッジゴシック様式の採用を打ち出したのである。

しかし、ライフスナイダーら、在日の幹部だけで決定できる事柄ではなく、米国聖公会にその意向を打診したのであった。そこで彼は「新設計を在京の建築技師に依頼<sup>(71)</sup>するとし、そこからガーディナーが設計を手がける」という話が浮上してきたようだ。

ライフスナイダーからの報告を受けて七月八日、ウッドは返信を認めた。この中でウッドは、個人としては日本様式を採用することには賛成という意見を述べている。元々クラムを紹介したのはウッドであったので、あるいはクラムの顔をたてるためにこういうことを書いたのかもしれないが、いずれにせよ最終的には委員会で打ち出された方向性に賛意を示し、カレッジゴシック様式の採用を支持した<sup>(72)</sup>。

カレッジゴシック様式は、先にも触れたように実はアメリカの大学の歴史の中では、必ずしも主流であったわけではない。むしろ一九世紀後半から本格的に進んできた、アメリカの大学の近代化と大規模化に対する反省から二〇世紀に入るころに流行し始めた様式であった。

だとするならば、この様式は決して漫然と採用したものではなく、非常に意図的なものであった。実際、戦前における日本のキリスト教系学校で本格的に採用した例

は稀である。

一九一二年九月二四日、米国聖公会伝道局執行会議は、新キャンパス建設の五万ドルの資金の支出を承認した<sup>(73)</sup>。こうした動きの中でライフスナイダーは、ガーディナーが設計することをアメリカに打診し<sup>(74)</sup>、実際にガーディナーは平面図など、たたき台となる基本計画案も作成したようである。

一九一一年の米国聖公会年次報告の中で東京教区監督マキム (John McKim) は、伝道局の承認さえ得られれば、すぐに建築に取りかかる意向を表明していたが、実際には承認をとりつけることは容易なことではなかった。翌年の報告書でも、ミッシヨンボードの承認が得られないため未だ実現の見込みが立っていないことを認められているように、事態は暗礁に乗り上げつつあった<sup>(75)</sup>。

一九一二年一〇月一日、ニューヨークのウッドは東京のマキムに宛てた書簡の中で、ガーディナーが立教の新キャンパスの計画案をすでに作っているのなら、彼にニューヨークに送ってもらうよう依頼している<sup>(76)</sup>。そしてこれではできるだけ早く勧告委員会 (Council of Advice) において審議されるべき問題との認識を示した<sup>(77)</sup>。

ニューヨークに本部を置く米国聖公会伝道局は、重要事項を決定する機関として伝道局会議を置いていた。し

かしこれは三カ月に一度の開催なので、日常的な事項は、月一回開催の執行会議 (Executive Committee) で処理していた。ただ、この時期には資金の支払いなどの伝道活動に関わる重要問題を審議するため、伝道局理事会議長の諮問機関として勧告委員会が設置されていた<sup>(78)</sup>。恐らくウッドは問題の性格から日常的な事項を審議する執行会議ではなく、議長の諮問機関である勧告委員会で扱うことが望ましいと考えたのだろう。

現在のところ勧告委員会をはじめとする米国聖公会の各機関でどのような議論がなされたのかはわかっていない。しかし具体的にさまざまな検討が行われたことはまちがいない、翌一九一三年二月一四日にウッドは、マキムに対し議論の過程で新たに浮上してきたいくつかの問題点を列挙している。

1. 建築に使用する素材。
2. 異なった素材を使用した場合の日本におけるコスト。
3. 作業員の熟練度によるコストの差異。
4. 敷地内で爆破作業や整地がどの程度必要か。
5. 衛生基準に適合しているか。なぜガーディナープランではトイレは別棟に置いているのか。
6. 下水設備のコストはもっと下げることができないのか。

7. 原案で示されている入口の配置は自然で必要といえるか。

8. 地震に対する何か備えはあるのか。<sup>(80)</sup>

ウッドが投げかけた疑問点に対してガーディナーは一九一三年三月一三日、マキムに書簡を送り、自らの建築計画、特に配置計画の意図を説明した<sup>(81)</sup>。例えば入口の配置は池袋駅や聖公会神学院との位置から考えて適切に配置したことや、トイレが独立しているのは費用を抑えつつ校舎と寄宿舎の両方から便利なようにという配慮だったなどと、項目ごとに具体的に説明している。

ガーディナーからの説明を受けたマキムは三月二十日、これを踏まえウッドに書簡を送った。この中でマキムは伝道局から指摘された点を採り入れようとするとさらに一万五千ドルもの資金が必要だと指摘し、もしミッシンボードが近い将来、それを用意できないのなら、我々は大学計画を放棄し、土地を売却したほうがよい。大学用地はすでに三年以上前に購入したものが、もし大学を作れないのなら資金を提供してくれたフィラデルフィアの女性たちに合わす顔がない、などと厳しい調子でウッドに訴えている<sup>(82)</sup>。

マキムの書簡を受け取ったウッドは、四月一六日に返信している、この中でウッドは、以前は五万ドルあれば充分と言っていたのに、今頃になって足りないとはどう

いうことか。ガーディナー案では二〇〇人の学生を想定しているが、これは現状に比べて規模が大きすぎるのではないかなどと疑問を呈している。また池袋に移転しても、すぐにそんなに学生が増えるとは考え難い、などと在日の宣教師たちの今後の立教大学の事業の展開の見通しに対して厳しい見方を突き付けている<sup>(83)</sup>。

ウッドからの返信を受け取ったマキムは五月二日、さらに反論している。この中でもし執行会議がガーディナーの作成した案に不満であるのなら、学校建築に精通した他の建築家を挙げるべきではないのか。我々はできるかぎりのことをやっている。日本ミッシンではガーディナーを描いてこの計画を実行できる人物はいない、などと主張した<sup>(84)</sup>。

このやりとりで明らかになったのは、伝道局側はトイレの位置や資金といった具体的な問題だけでなく、建築家としてのガーディナーをあまり高く買っていないか、ということである。あるいは彼が建築家としての正規の教育を受けていなかったことなどが、その評価に影響を与えていた可能性もある。

もちろん大学で正規の建築学の教育を受けていないという点では、先に触れたクラムも同じであった。しかし、すでに欧米諸国で華々しい実績を挙げていたクラムに対して、ガーディナーは、基本的に日本のみで活動し

ている上に、後のように多くの実績を積んでいっているわけではなく、米国にいる人々からみるとそれだけで信用が低かったのかもしれない。

しかし日本にいるマキムはこれまでのガーディナーの実績を評価し、そのプランの推進を強く主張したのである。とはいえ、どうやらウッドを中心とする伝道局は、建築家をめぐる日本ミッシヨンとの交渉は事実上決裂したと判断したようだ。マキムに指摘されるまでもなく、アメリカでこうした事業を担うことのできる建築家を物色するようになった。そこで浮上してきたのが、マーフィー&ダナ設計事務所だったのである。

マーフィー (Henry Killiam Murphy) は、一八七七年コネチカット州ニューヘブーンに生まれている<sup>85)</sup>。エール大学を卒業後、ニューヨークのマスクレイ事務所に勤務した。その後同じくニューヨークのトレシー&スチュアート事務所に移っている。その後、ヨーロッパ諸国を歴訪しさまざまな建築を実地に見て回った。帰国後、一九〇六年から七年にかけて独立した建築家としての活動を始めるようになった。一九〇八年には、ダナを共同経営者に迎えて設計事務所を開業した。

著名な詩人を祖父に持つダナ (Richard Henry Dana, Jr) は、ハーヴァード大学の地元であるマサチューセッツ州ケンブリッジに生まれ、そのままハーヴァード大学を卒

業した後、コロンビア大学で建築学を修め、その後さらにフランスのエコール・ド・ボザールに留学したという経歴を持つ建築家であった。一九〇八年以降本格的に活動を始めたこの事務所は数年間の間に着実に業績を重ね、規模は拡大していった。当初は住宅などを手がけていたが、次第に公共建築にも手を染めるようになった。初期のマーフィーはエール大学の人脈から仕事の受注を拡大していったとされるが、この時期のエール大学は、カレッジゴシック様式による校舎が次々と整備されていた<sup>86)</sup>。マーフィーの建築もこうしたエール大学の建築に影響を受けていた可能性がある。

同事務所はエール大学の人脈からすでに湖南省の医学校の仕事を受注するなど、アメリカ国内だけでなくアジアにも手を広げていた。また、一九一四年には朝鮮における各教派連合のキリスト教大学として構想された朝鮮基督教学校のキャンパス設計も担当した<sup>87)</sup>。そうした一連の流れの中で立教大学の設計も引き受けることになったようだが、その直接的な経緯は現在のところよくわからない。

ただ、二人はそのプロフィールからも明らかのように、大学で正規の建築学を修め、アメリカ東海岸の第一線で活躍していた建築家であった。これに対してガーディナーやヴォーリズは日本でこそ、その名を知られて

いたものの、独学で建築学を身につけたいわばアマチュアの建築家であり、アメリカ本国からみると必ずしも信頼できる建築家としては見えなかつたのかもしれない。これに対して少なくともマーフィ&ダナは、ゴシックなど正統的な様式建築の設計が担える建築家として期待されていたようだ。ただ、マーフィはこの後中国の様式を西洋の様式に適合させた建築を多数建設していくようになった<sup>88</sup>。いずれにせよ、マーフィ&ダナ事務所がどのような経緯で浮上してきたのかは、今後検討すべき課題の一つである。結局、一九一三年六月二七日金曜日、ウツドはマーフィ&ダナ事務所に建築設計の打診をするに至つたのである。

### おわりに

本稿では、主に立教大学池袋キャンパスの設計者を決定するまでの過程を検討してきた。立教大学の池袋への移転は、高等教育拡充の流れの中で、それまでの築地キャンパスにおける立教中学校との同居を解消し、本格的な大学教育を展開していくために構想されたものであった。その用地や建物建設の費用は、主に米国聖公会からの寄付によるものであった。

実はこのことが、一九二二年に立教大学が同志社大学

に次いで、日本で二番目のプロテスタント系大学として大学令により認可される大きな基礎となつたことはまちがいない。一九一九年に同志社大学が認可されて以降、メソジスト系の関西学院や青山学院も一九二二年の大学昇格をめざしてキャンパス整備など準備を進めていたが、結局この時それを実現したのは、米国の母教会から資金提供を得ることができた立教大学だけだったのである。

しかし、母教会から資金を得るということは、その干渉も強く受けるということでもあった。用地購入については比較的順調に進んだものの、その上に整備する校舎や図書館、チャペルなどといった建物の設計をめぐっては、米国聖公会伝道局、日本在住の宣教師、日本人聖公会員らの間でその思惑の違いが表面化し、時には強い摩擦も引き起こしたのである。

もちろん、キリスト教学校にあつては母教会との関係は極めて微妙な問題を含むことはよく見られることであり、それが紛争を引き起こすことも決して珍しいことではなかつた。

とはいえ、全体として見れば立教においては米国聖公会の強い主導性の中でキャンパス計画の検討がなされたことが大きな特徴であり、日本様式建築の構想などはそうした環境の中でこそ浮上してきた案であつた。また、

ガーディナー案の採用の可否やマーフィ&ダナ事務所への設計依頼という最終決定も、基本的には米国聖公会側が事態をリードする中でなされたものである。

こうした母教会の影響力の強さが、同志社や青山学院、関西学院など、他のプロテスタント系学校に比べての、この時期の立教学院の特徴であり、それがキャンパスの建築という極めて具体的な存在のあり方にも大きな影響を及ぼしていたのである。

本論の中でも触れたように、最終的に池袋キャンパスの設計を担ったマーフィおよびダナは、ガーディナーやヴォーリズなど当時日本のキリスト教学校の設計で活躍していた建築家たちとは異なり日本在住経験もなく、日本での作例も確認することができない建築家であった。ただ、すでに米国東海岸で実績を積み活躍していたという点で、米国からの視点で言えば、ある意味自然な選択であったと言える。とはいえ、当時の日本のキリスト教学校の中では極めて特異なものであり、その中で実際に建設が進んでいく過程については、次号以降で詳細にとりあげることにはしたい。

註

(1) 本方十根『「大学町」出現―近代都市計画の錬金術』（河出ブックス

二〇一〇年）

(2) 拙稿「キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画」『立教学院史研究』（七号 二〇一〇年）

(3) “What the Church in Japan Most Needs”, *The Spirit of Missions*, March 1909

(4) 「立教大学の拡張計画」『基督教週報』一八卷一九号 一九〇九年

(5) 同右

(6) “What the Church in Japan Most Needs”

(7) *Ibid.*

(8) 奥村芳太郎編『大学シリーズ 立教大学』（毎日新聞社 一九七一年）八四頁

(9) 井深梶之助「基督教々育の前途」『開教五十年記念講演集 附祝典記録』（教文館 一九一〇年）六九―七五頁

(10) 前掲「基督教々育の前途」

(11) 前掲「立教大学の拡張計画」

(12) 前掲「基督教々育の前途」

(13) 前掲「開教五十年記念講演集 附祝典記録」五七八頁

(14) 大西晴樹「キリスト教大学設立運動と教育同盟」『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』（創刊号 二〇〇三年）、小川智瑞恵「立教学院とエキュメニカル運動」『立教学院史研究』（第二号 二〇〇四年）

(15) 中国では、一九二四年に米国聖公会系の文華大学とロンドン伝道協会ウエスレアン・メソジスト教会系の博文書院が合併して華中大学が設立されているので、米国聖公会の方針が当初から確固としたものであったわけではないが、全般的には他教派との連合や合同に消極的であった。華中大学も、その後さらに他教派が加わる中で聖公会の存在感が埋没していったことから、以後その方針はより明確化していった（大江満氏のご教示による）。



- (16) 「合同基督教大学設立計画の次第概要」(青山学院資料センター所蔵 A A O 25 : 4)
- (17) 前掲「立教大学の拡張計画」
- (18) 同右
- (19) "What the Church in Japan Most Needs"
- (20) 前掲「立教大学の拡張計画」
- (21) "St. Paul's College, Tokyo. Fund to June 1st, 1910". The Spirit of Missions, July, 1910
- (22) 前掲「立教大学の拡張計画」
- (23) 同右
- (24) 同右
- (25) 前掲「立教大学の敷地」
- (26) 前掲「立教大学の拡張計画」
- (27) Henry St. George Tucker, "Exploring The Silent Shore of Memory", Whittier & Shepperson, 1951, p.151
- (28) "Exploring The Silent Shore of Memory", p.165
- (29) 欧米におこった後のモダニズムの台頭の中で、ロシックリヴァイバルの推進者であったクラムは必ずしも高く評価されない時期が続いたが、近年は再評価が進んできた。ただし、日本との関係については今後の研究の課題である(横手義洋氏の「教本(249)」)。
- (30) "Exploring The Silent Shore of Memory", p.165
- (31) 「タット氏と日本建築」『建築雑誌』一三四号 一九〇六年六月
- (32) Ralph Adams Cram, "Impressions of Japanese Architecture", New York: Japan Society, Boston: M. Jones, 1930, p.19~23
- (33) Choji Don, "Slanty-eyed Architecture?", Rice University, p.119
- (34) Mira Locher-Foword, "Impressions of Japanese Architecture", Tuttle Publishing 2010, p.15
- (35) 児玉実英『アメリカのシヤポニスム』(中公新書 一九九五年) 四〇五頁
- (36) 「本議院建築ノ方針ニ関スル件」『公文別録・内務省・明治十九年・明治三十年・第一巻』(JACAR, Ref. A03023066800, 国立公文書館)
- (37) 白井堯子「福沢諭吉と宣教師たち」(未來社 一九九九年) 二二三、四頁、土屋博政『ユニテリアンと福澤諭吉』(慶應大学出版会 二〇〇四年) 九四~九七頁。
- (38) 前田英昭「〈資料〉金子堅太郎 欧米議院制度取調巡回記(1)」『政治学論集(駒澤大学)』四四号 一九九六年
- (39) 金子堅太郎『議院建築意見』(一八九一年) 四四~四五頁
- (40) 前掲『議院建築意見』四八頁。
- (41) 前掲『議院建築意見』四九、五〇頁。
- (42) 堀勇良『日本の美術Ⅷ 外国人建築家の系譜』(日本の美術 4 4 7 二〇〇三年) 六〇頁
- (43) 長谷川英『日本の建築(明治大正昭和) 4 議事堂への系譜』(三省堂 一九八一年) 一〇五頁
- (44) 前掲『日本の建築(明治大正昭和) 4 議事堂への系譜』一〇三頁
- (45) 「米国建築技師の渡来」『建築雑誌』一三四号 一九八八年
- (46) Ralph Adams Cram, "My life in Architecture", Little, Brown, Boston, 1936, p.98, 99
- (47) "Impression of Japanese Architecture" p.21, なお、この時にクラムが作成した案の外観図は本書に掲載されていないが、堀前掲書六三三頁にも掲載されている。
- (48) 藤森照信『日本の建築(明治大正昭和) 3 国家のデザイン』(三省堂 一九七九年) 一〇七頁

- (49) 前掲「日本の建築」[明治大正昭和] 3 国家のデザイン」一〇七、一〇八頁
- (50) 「クラム氏と日本建築」『建築雑誌』二三四号 一九〇六年六月
- (51) “Slant-eyed Architecture?”, p.108
- (52) クラムは関東大震災後にも、女子英学塾本館の設計案を作成している。この時も費用の問題から採用には至らなかったが(津田塾大学一〇〇年史)〔学校法人津田塾大学 二〇〇三年〕一六三頁)の際にも彼は和風で校舎を設計しよう (“The Architecture of Ralph Adams Cram and His Office”, W W Norton & Co Inc. 2007, p.178, 179)。この点についてクラムの和風建築を設計する点についての執念は強かった。 (女子英学塾本館の建築とクラムとの関係について、杉浦明および横手義洋両氏の「」教示を賜った。)
- (53) “Exploring ‘The Silent Shore of Memory’”, p.165
- (54) Ibid.
- (55) J.Yan Wie Bergamini, “Christian Architecture in Japan”, The Spirit of Missions, July 1937
- (56) 松波秀子「昭和初期における日本聖公会和風教会堂について(その二) : 日本聖公会の建築史的研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』(一九九四年)
- (57) 松波秀子「昭和初期における日本聖公会の和風教会堂建築について : 日本聖公会の建築史的研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』(一九九二年)
- (58) “Exploring ‘The Silent Shore of Memory’”, p.165
- (59) Paul Venable Turner, “Campus : an American Planning Tradition”, MIT Press, 1987, p.217, 219
- (60) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』(立教大学二〇〇七年)七八、九頁。
- (61) 「学院総理より」『立教学院学报』一九二二年七月
- (62) その中で青山学院新ガウチャーホール(一九〇六年)、同弘道館(一九〇七年)、遺愛学院本館(一九〇八年)など、他教派の学校の校舎設計も手がけるようになった。
- (63) 松波秀子「シエームズ・マクドナルド・ガーヴェイナーの人と作品」『築地居留地』第一号 二〇〇〇年
- (64) 松波秀子「James McDonald Gardner の来日までの経緯 : 日本聖公会の建築史的研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』(一九九三年)
- (65) “St. Paul’s College of Tokyo”, The Spirit of Missions, November, 1912
- (66) Reifsnider to North, June 8, 1912 Japan Records 17-3-165
- (67) “St.Paul’s College of Tokyo” The Spirit of Missions, November, 1912
- (68) “Opinion as to Suitability of a Japanese Style of Architecture for School and College Buildings in Japan”, Japan Records 16-8-161
- (69) “A New Collegiate Development”, The Far East, May 23, 1914
- (70) “St. Paul’s College of Tokyo”, The Spirit of Missions, November, 1912
- (71) 前掲「学院総理より」
- (72) Wood to Reifsnider, July 8, 1912 Japan Records 17-3-165
- (73) “Action of Executive Committee, September 24, 1912, and Board of Missions, September 25, 1912” Japan Records 16-8-161
- (74) 前掲「学院総理より」
- (75) “Report of the Bishop of the Missionary district of Tokyo 1911-1912”

- (76) "Our Mission in Japan—Tokyo 1912-1913"
- (77) Wood to Mckim, October, 11, 1912 Japan Records 16-8-161
- (78) Memo from Wood to Clark, October, 11 1912 Japan Records 16-8-161
- (79) Julia C. Emery" A Century of Endeavor, 1821-1921: a record of the first hundred years of the Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the United States of America" Department of Missions, 1921, p.289, 290
- (80) Wood to Mckim, February, 14, 1913 Japan Records 16-8-161
- (81) Gardiner to Mckim, March, 13, 1913 Japan Records 16-8-161
- (82) Mckim to Wood, March, 20, 1913 Japan Records 16-8-161
- (83) Wood to Mckim, April, 16, 1913 Japan Records 16-8-161
- (84) Mckim to Wood, May 2 1913, Japan Records 16-8-161
- (85) 式ノ、トローヤ、ダマシ、タナ、ロ、イ、チ、 Jeffrey W Cody, "Building in China: Henry K. Murphy's "Adaptive Architecture", 1914-1935", Hong Kong: The Chinese University Press, Seattle: University of Washington Press, 2001, p.17-28 22 頁、27、28 頁。
- (86) "Campus : an American planning Tradition", p.239, 240
- (87) "Building in China" p.65
- (88) マーフォは日本においでても一九二三年には、神戸女学院に和風様式の校舎を提案したとされている。(『神戸女学院八十年史』神戸女学院八十年史編集委員会 一九五五年) 一三二頁。